

神の形に似せて創られた愛すべき私たち

梁陽日

奨励者紹介〔やん・やんいる〕
同志社大学社会学部嘱託講師
在日大韓基督教大阪教会長老

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。
(創世記 1 章 27 節)

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。
(創世記 2 章 7 節)

1. 心傷ついた人たちの支援からミッションとは何かを考える

私はふだん同志社大学で精神保健福祉士というメンタルヘルスのスペシャリスト養成に携わり、精神障害のある人たちの支援を行う社会福祉法人の運営を担っています。また、メンタルヘルスの取り組みからセルフケアの大切さを一般の人たちに広めたり、対人援助職を対象にした「ケアする人のケア」の普及にも取り組んでいます。

「精神疾患」「精神障害」というと、世間では自分とは関係のないものと思われがちですが、格差と排除が蔓延する現代社会においては、子どもから大人までストレスフルな社会の中に巻き込まれ、ほとんどの人たちが何らかの生きづらさ(病理性)を抱えているのは珍しくありません。私たちは人格形成や日常生活において、家庭や学校でも何らかの軋轢やいじめ問題などで傷つきます。あるいは社会生活においても、経済不況やハラスメント環境に身を置く中で不安を感じます。高齢になると、老いから来る衰えや認知症の問題など、関係のないと思いついていて、あらゆる場面でメンタルヘルスの課題は常に隣り合わせであることがお分かりいただけるかと思います。

ところで皆さん、「障害」という言葉についてどのような印象をお持ちでしょうか。心傷ついた当事者の方々から「障害」の言葉の印象を聞くと、すこぶる評判が悪いのです。なぜなら、この言葉の意味は「差し障り」という妨げや故障があって、「害」がある人で「障害者」という意味だからです。ですから、当事者の方々誰もこの言葉を受け入れることはできません。

英語でも元々は Handicapped Person と表現してきましたが、今から 60 年前にアメリカで障害のある方々が自分たちの尊厳を守るための運動を全米に広げ、“私たちは障害者の前に人間だ”“人間としての尊厳を保障せよ”と人権獲得の大きなうねりを上げました。そこから今では Handicapped Person から、Challenged という呼称が広く使用されるようになっていきます。

Challenged、すなわち自分の人生を開拓する人、自分の幸せ実現のために挑戦する人という意味ですが、このお話を聴くと皆さんもだいぶ印象が変わるのではないのでしょうか。同様にこのお話を当事者の方々にすると、「元気が出る」「まさに自分の生き方そ

のものを表している」「一生懸命生きているのがうれしくなる」とポジティブな反応が返ってきます。

これって実は障害のある方に限った言葉ではないですよ。Challenged というのはすべての人に共通した普遍的な意味合いを持つ言葉であることがお分かりいただけるのではないのでしょうか。よく人間は何のために生まれてきたのか？という問いに「それは死ぬために生きているんだ」という刹那的な答えを出す人もいますが、そうではなく与えられた命を全うして、自分なりの幸せを築くために生きているんだという捉えの方がとても意味のあることではないかと思います。

最初にお読みした聖句の創世記 1 章 27 節にある、「神様は天地創造の中で『神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。』」とは、神様は自分の姿を人間に似せて創ってくださったほどに、私たちを愛してこの世に送ってくださったんだという生まれてきたことの意味を教えてくれている。自分の尊さを感じざるを得ないメッセージの重みが伝わってくるのです。私は心傷ついた人をはじめ、障害のある方々との関わりの中から、このような生きることの意味、すなわち人間のミッションとはなんなのかということに気づかされることが多くあるのです。

2. アイデンティティ・クライシスを超えて得た大人としての責任

私は大阪で生まれ育った在日コリアン、すなわち旧植民地出身者とその子孫の三世に当たります。在日コリアンと言っても極端な差異がある訳ではなく、このチャペルアワーに集っている皆さんと同様に地域社会で生まれ育ってきましたが、私自身は高校卒業するまで日本名で暮らしてきました。特別に民族意識を持つような家庭環境にあった訳でもなく、ごく普通の子どもとして育ってきましたが、子ども同士のトラブルが起きると同級生から「チョーセンジン」と心ない言葉を吐かれ、その際に私は何も抵抗できないほどショックを受けるばかりでした。

中学3年生になった時、当時は全国的に校内暴力が吹き荒れていた時代であり、私はその一年間、在日コリアンであることを理由にクラスの中でいじめの標的になったことがあり、本当に悲惨な学校生活を過ごしました。しかし高校生になると地域を離れ、スポーツクラブで活躍して国体の大阪代表や全国大会に進出するなどしましたが、高校三年生の進路検討時にクラブの同級生たちは関東や関西の有名企業・大学にスポーツ推薦で進路を決めていく中、副キャプテンだった私は韓国籍であることを理由にすべて進路を断られることがありました。その時は本当に絶望しかありませんでした。

そんな悲惨なお先真っ暗の中で私はどうなったかというと、「もう逃げたり隠れたりして生きるのは嫌だ」「どうなるかわからないが、ありのままに自分らしく生きたい」という結論に至り、高校卒業と同時にヤン・ヤンイルという本名を名乗ることにしました。当時の家族や親族に民族的なモデルになるような人は誰もおらず、本名で生きること自体が大きなリスクでしかありませんでしたが、それ以上に私はありのままの自分を受容して生きていきたい、そのこと自体に意味があるのかどうか確かめていきたい、という意志の方が大きかった気がします。

あれから 40 年経ちましたが、本名を名乗って良かったことはあるのか？というと何もありません。むしろ残酷な社会の現実を目の当たりにしたり、人間の冷たさにも多く触れ

ることがありました。日本で生まれ育って三代目ではあるけれど、100 年以上にわたって日本社会で生きてきたにもかかわらず、いまだに共に生きる隣人として認められない“ガラスの天井”が横たわり、自分の思うような進路を阻む壁が今も大きく存在しています。

しかし、そんな中でありながら 60 歳ほどになった私が大切にしていることがあります。それは大人の責任として、若い世代、子どもや孫の世代の人たちに「日本で生まれ育って良かった」と思える社会をプレゼントしたいということです。私自身は前の大人の世代から何も良いものは授かっていませんし、同世代からも同様です。しかし、そのことに不平不満を言う以上に、次世代にはこの社会で生まれ育って良かったと思える社会環境をプレゼントできるように尽力したいと思っています。もちろん、なんだかんだ言いながら私も人の優しさや支えに救われたことがたくさんあります。だからこそ、それを倍にして社会に恩返しをしたい。これは当然ながら日本人や在日コリアン、あるいはニューカマーの方々といった何人（なにじん）とか関係ありません。

残酷な社会であること以上に、それでもそれ以上に信じられる人がいる。一生懸命生きている人を快く応援するつながりがあることを多くの若い人たちに伝えることで、まだまだ私たちの社会は希望があることを信じてもらえるように、大人の責任で次世代にバトンタッチできることが今の私のライフワークになっています。

3. リカバリー（生き直し）こそ大切な福音

今日読んだ2つ目の聖句である創世記 2 章 7 節には、人間誕生の物語が再び記載されています。元々は先ほど読んだ創世記 1 章 27 節の天地創造の中で、私たちは神に似せて創られたほど愛すべき存在なんだとありましたが、実はこの 1 章と 2 章の人間誕生の記載には 500 年以上の時間的な隔たりがあります。

それは最初に紀元前 10 世紀ごろに書かれ、その後は紀元前 5、6 世紀ごろに後から加えられたのですが、これはなぜかというこの紀元前 5、6 世紀の間にバビロン捕囚というイスラエル民族の国家が分裂、外国の侵略を受けて解体され、ついには奴隷として強制連行されて行くという文字通りの苦難の歴史があったのです。かつては神様から祝福された選ばれた民族として栄華を誇りながら、その傲慢さから墮落していき、ついには対立、分断、そして侵略されて消滅、分散していく中で、預言者が神の御言葉を受けて民衆に発したのが、この創世記 2 章 7 節にある“主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった”という文言です。

想像するに、この当時のイスラエル民族の人々は周囲から土の塵、文字通り「ゴミ」「クズ」（取るに足りない者）として蔑まれ、差別されていたのではないのでしょうか。その時に使われた象徴的な言葉が「アダマ（土の塵）」であり、その屈辱の中から神様が預言者の言葉を通じて発せられたメッセージが、「私たちはアダマ（土の塵、すなわち差別されるゴミ）ではない、アダム（固有名詞ではなく Human、人間）だ」であり、「神様からの生命の息吹を与えられた大切な存在なのだ!」と高らかに人間解放の宣言が本来の意味ではないかと私は考えるのです。

この2章の逆説的な人間誕生の文章は、当時の絶望の最中にいたイスラエル民族の人々にとって、どんなに生きる希望、勇気を与えたことでしょうか。それはかつて「Handicapped Person（障害者）」と社会から烙印を押された人たちが、自分たち

は「Challenged（人生を開拓する人）」と宣言したがごとく、また在日コリアンが「チョーセンジン」と嘲られても「ありのままに自分らしく生きる」ことを選択して共に生きる隣人として社会に参加することで、多文化共生に貢献することにも共通したイエス・キリストが述べた福音（良き知らせ）そのものの具現化と捉えることができるのではないのでしょうか。

先述したように、精神保健福祉分野や障害者の自立生活運動の中で育まれた取り組みに、「リカバリー」という概念があります。これは疾患や障害からの回復、すなわち健常者に近づくというのではなく、今では「自分らしく生き直す」という再生・新生という逆説的な人生の回復という意味合いに転換しています。この創世記2章の人間誕生の物語と現代のリカバリーはとても有機的にリンクしており、すべての人に普遍的な生きることの意味を示唆してくれると言えます。

4. 神様からの希望「光あれ」

今回は創世記1章と2章の人間誕生の聖句を中心にお話をさせて頂きましたが、最後にその物語の基となった天地創造について言及して終わりたいと思います。

創世記1章 1節～3節をお読みします。「1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。」私たちのこの世は混沌とした暗闇であり、その中において神様は私たちが生きやすいように光をもたらしてくれました。すなわち混沌とした世の中に対して、神様自らが宣言して光を灯してくださったように、現代を生きる私たち自らがこの世において、自分の人生において絶望から希望を生み出す生き方を求められるのではないのでしょうか。

私は、精神的困難を抱える人々やマイノリティの立場にある人々と関わる中で、数えきれないほどの希望に出会ってきました。彼らは人生の谷間にあっても、自らの命を輝かせようと努力し、周囲の人々に影響を与えています。そうした姿に学び、私たち自身もまた、自らの人生をどう生きるかを問い続けることが求められているのです。

どうか皆さんが、それぞれの人生の中で、自分が神の形に似せて創られた尊い存在であることを信じ、喜びをもって日々を歩まれますように。そして、違いを越えて他者とつながり合い、共に生きる希望の社会を築いていくための担い手となってくださることを、心から願っています。

あとはどう生きるか、すべて委ねられています。しかしその人生の道のりも神様が「光あれ」と常に希望を示してくださることを信じて、自分の幸せを実現するチャレンジドとしての第一歩を踏み出されることをお祈りします。